





女の勲章・下巻・山崎豊子・中央公論社



© 1961

女の勲章 下巻

著 者 山崎 豊子

昭和36年3月13日印刷

昭和36年3月23日発行

発行者 栗本和夫

印刷所 凸版印刷

発行所 **中央公論社**

東京都中央区京橋二の一

電話 (561) 5921-9

振替東京 34 番

定価 320 円

女の勲章 下巻

青　い　雲

伊勢湾の上を飛んでいるらしく飛行機の窓の下は、青い雲の海が広がっている。白い鱗のような雲の切れ目に、真っ青な光が波のように流れ、海とも雲ともつかぬ真っ青な空間が視界を埋めている。式子は、窓の外に眼を向け、眩しげに雲の流れを追いつながら、ここ半年來のことを、飛ぶような速さで思い返した。

昨秋の十一月に「デザイナー物語」が封切られると、その甘美な華やかさを持ったストーリーと、スクリーンの中に映し出された豪華なファッション・ショウが、若い女性の夢を満たし、それをデザインした大庭式子の名前が、その映画のヒロインのように若い女性の胸に甘美な印象を与えたようだった。俄かに聖和服飾学院の郵便物が多くなり、その殆んどが院長の大庭式子に対する甘いファンレターであり、織維メーカー、商社からの封書は、きまって、若い女性向きのロマンティックなデザイナーの依頼であった。新聞や雑誌も、その反響を見逃さず、一斉に筆を揃えて、デザイナー大庭式子の才能を誇張した表現で書きたてた。

式子の予期した通り、「デザイナー物語」は、映画として成功すると同時に、大庭式子の名前を全国的なものにすることにも成功したのだった。年が明け、三月の入学期に入ると、急に地方から聖和

服飾学院への入学希望者が殺到し、甲子園分校四百人、大阪本校千五百人の募集人員が、忽ち定員に満ち、通学距離の許せる範囲で、四月十日開校の運びになっていく京都のチェーン・スクールへ振替えをしなければならぬほどであった。すべてが順調に運び、順調に運び過ぎることで、式子は、最初のうちは、空恐しく思う時もあったが、次第にそんなもともらしい反省をする自分が、臆病でしまったれに見え、大阪の商家の名門に生まれ、才能と容貌に恵まれている自分が、この程度の成功と幸運を手にするのは、当り前のことだと思ふようになった。

何時の間にか、海岸線を離れ、鈴鹿山脈治いに飛んでいるらしく、氷山のような白い山形の雲が厚く視界を遮った。式子は、まるい小さな窓から眼を離すと、疲れたように椅子の背に体をもたせかけ、隣りの座席で眠りこけている大木富枝の方を見た。飛行機に乗り込むなり、ブルーの機内毛布を膝にかけ、ふくよかな下服れの顔にかすかな寝息をたてて、眠りこけている。二晩ぶつ通しの徹夜仕事のあとにもかかわらず、富士額のぼってり肉附いた顔に、艶やかな張りを失わず、つぼむような小さな受け口も、紅い血の色を見せている。徹夜明けの疲労も、富枝の年齢でなら、少し眠れば、すぐ生気を取り戻せるものらしい。

式子は、その健康な若さに眩しげな視線を当てながら、今まであまりあてにできなかった大木富枝が、意外なほど役にたつことに快い驚きを覚えた。東京での仕事が増え、大阪・東京間の往復が激しくなると、式子のカバン持ちぐらいのつもりで連れて歩くことにした富枝であったのに、東京で催されるファッション・ショウや、デザイン展の制作を徹夜で手伝い、必ず予定の時間に間に合わせた。倫子が甲子園校、かつ美が京都分校を受持つことになり、この二人が学校から抜けられなくなっている現在、富枝は式子にとって重宝な存在であった。

「いややわ、先生、人の寝顔を見はって——」

不意に、富枝が体を起し、甘い大阪弁で式子を睨んだ。静かな機内に、富枝の声が、声高に響き、式子は、ちょっと窘めるような眼をしてから、

「富枝さんの、そのきれいな富士額に見とれていたのよ、あなたは、珍しく日本的な顔だね」

そう云い、富士額の下に、寝起きの腫れぼったい眼を光らせている富枝の顔を見詰めるど、

「そやから、しゃれたお洋服を着ても、ちっとも着ばえがせえへんし、損やわ」

富枝は、鼻にかかった間意い大阪弁で云った。

「損なのは、富士額より、そのきつい大阪弁よ、もう少し、何とかならないものかしら——、せめて、学校の教壇の上で話す時と、東京で新聞や雑誌関係の人と喋る時ぐらい、普通の標準語にならない？」

式子が、やや厳しい口調で云うと、富枝は、一瞬、困ったような顔をしたが、

「それだけは、なんぼ、先生に云われたかて、直れしまへんわ、私は、大阪弁で云えへんかったら、舌に鉛が着いたみたいに舌が重うなって、動けませんねん。それに、私は、なんで、先生がそない大阪弁をいやがりはるのか解れしまへん。この間から、私はずっと、東京でも、大阪弁で通してまうけど、誰もけったいな顔をしたり、笑いはれしまへん、それよか、かえって、女らしい言葉やと褒めてくれはりますわ」

富枝は、反証を突きつけるように云ったが、それがまた、式子にとって不愉快な反証であった。大阪弁が女らしいとか、艶めかしいとかいわれる度に、大阪を鑑賞して楽しんでいる東京人の妙な優越感がちらついて、嫌味だった。

「そろそろ、機内食の出る頃だすわ」

富枝は思いついたように云い、スチュワーデスの坐っている後尾の席を、無遠慮に振り返った。

「いやね、お行儀の悪い——」

式子が、軽く窘めると、

「かましまへんわ、どうせ、出るものにきまっていますさかい——、それに、ちゃんと飛行機の中で、昼食をすましておかんと、東京へ着いた途端、忙しいになって、食べはぐれになるかも解れしまへん。羽田から日活ホテルへ直行して、モデルの衣裳合わせを五着すまして、それからすぐ三時半からの舞台稽古に遅れんように行かんまりまへん」

そう云い、富枝は、自分の足もとに、大事そうに置いた大きな洋服箱を手で示した。その中には、東京の○新聞が主催する「十大デザイナー作品ショウ」に出品する春のタウン・ウェア二着と、アフタヌーン・ドレス、イヴニング・ドレス各一着ずつが入っている。それは、服飾界にデビューして三年目の式子が、錚錚^{そうそう}たる有名デザイナーと伍して、初めて東京の舞台に発表する作品であった。

サンドイッチとスープの機内食が運ばれ、それを食べ終えると、富枝はまだ寝足りないらしく、また体を倒した。式子も、体をずらし、軽く眼を閉じたが、容易に眠れない。式子は、体を起し、前の椅子の背についたポケットに手を伸ばすと、備えつけの絵葉書を一枚抜き取った。日航機が青空を飛んでいる平凡な絵葉書であったが、式子は、それを裏返すと、ハンドバッグからシャープペンシルと小さなアドレス・ブックを出し、最初に白石庸介様と書き記し、次に住所を記してから、暫く思案したが、式子は思い切って葉書をしたためた。

羽田に向う飛行機の中から突然、お便りを差し上げます御無礼をお許し下さいまし。

実は、明四月六日と七日の正午・午後3時・6時の各時間から○新聞主催のファッショ・ショウが産経ホールで開かれますが、私のデザインも発表致しますので、是非、ご覧戴きたいと存じます。ファッショ・ショウなどお嫌いだと存じながら、初めて東京で発表する私

の作品は、やはり先生にご覧戴けたらと、そう念^{ねん}っております。

と書き、式子は、一度、読み直してから、出来ましたら明日の六時にお越し戴けたら好都合でございます、なお切符は御来賓として受付に先生のお名前をお伝えしておきますから、そのままお入り下さいましと、書き足して、スチュワードスに速達便の投函を依頼した。

白石教授とは、昨年の秋、京都の瓢亭で静かな寛^{かん}の水音を聞きながら、夕食を共にして以来、会う機会がなかった。式子は、「デザイナー物語」の衣裳制作に追われ、封切後はまた、その反響に追われて、一カ月に五日、京都の大学へ出張講義に来る白石教授を京都へ訪ねることもなかったし、白石教授も、大阪城へ上った日以来、一度も式子の学校へ訪ねて来なかった。しかし、瓢亭の奥まった茶座敷に坐り、深い樹々と水に濡れた庭石を見ながら、孤独などというものは、人生の中で味わわなくてすむなら、すんだ方がいいですよと云い、空ろな笑いを泛べた白石教授の姿は、自嘲に似た孤独感に包まれ、妙に式子の心に残っていた。それは、式子とはかけ離れた無縁の世界に住む人のたまたまいであつたが、式子と同じように老婢と二人暮らしという身寄りの無さが、式子に平凡な親しみを持たせた。今までも、東京へ来る度に、連絡してみたいと思ひながら、それらしい機会がなかったのだ。

「先生、今、どの辺かしらん？」

また、富枝が、不意に眼を開いて、高い声で聞いた。窓の下を見ると、真っ青に波だつ海の中に大島が浮かび、大島通いらしい汽船が豆粒ほどの影を見せながら、淡く長い水脈を引いていた。

「ちょうど、大島の上、きれいだわ」

式子がそう云うと、富枝は、機内毛布を取り除き、ゆるめていたスカートのジッパーを閉じ、腰を

浮かせて窓の下を覗いたが、すぐ腰を下ろし、

「先生、さっき、どなたに絵葉書を書いてはりましたの？」

下眼れの顎を二重にくくるようにして云った。

「あら、あなた、知っていたの、寝てたんじゃなかったの？」

「うつらうつらしてましたさかい、知ってましてん、銀四郎さんにでっか？」

「あら、この人たら、何を云うの、白石先生に差し上げたのよ、明日のショウを観に来て戴くように」

式子が、やや改まった口調で云うと、

「あの先生は、そっと、あとを随つけて行つて揺ぶつてあげとうになるようなお人やわ、開校式のパーティーの時に、一度、お目にかかったきりやけど、何かそんな気がしますねん」

式子は、思わず富枝の顔を見た。倫子、かつ美、富枝の三人の古くからいる職員の中で一番齡下で、何かにつけて間ま意だるく見劣りのする富枝が、妙な勘を持っていることに驚いた。

羽田から車で日活ホテルに着くとファッション・モデルが先に来て、ロビーで待っていた。式子の姿を見ると、銜くはえていた煙草を灰皿に捨て、

「先生、先日はどうも——、今日は早く来てお待ちしておりましたわ」

我儘で時間に遅れることで定評のある白川洋子が、混血児のような茶色がかった大きな眼に華やかな媚びをうかべた。

「あら、白川さんが定刻に来るなんて、ちょっと信じられないことだわ」

式子が、大げさに驚くと、

「ひどいわ、私だって、好んで遅れるわけじゃあないんです、とても、消化しきれないほどのスケジュールを組まれちゃうからつい——、でも、大庭先生のお仕事には、絶対遅れないように致しますわ、だって、先生に睨まれると、映画に出るお仕事が悪くなくなるかも知れないもの——」

そう云うと、白川洋子は、富枝がそばにいるのも憚らず、形のいい唇で甘えるように笑った。絶えずナンバーワンを維持しているファッション・モデルらしい計算であった。式子が「デザイナー物語」の衣裳デザインに成功するまでは、大阪で開くファッション・ショウに出演を依頼しても、体よく断った白川洋子が、今度のファッション・ショウのために一週間前に大阪まで仮縫に來、今日もまたホテルまで衣裳合わせに來ているのだった。

「でも、こちらの定刻を守り過ぎて、ほかの先生方から、こちらが恨まれないようにしてくれなきゃあ駄目よ、じゃあ、早速、始めましょうね」

と云い、式子は先にたつて、エレベーターに乗った。八階で降り予約しておいた部屋に入ると、すぐ三面鏡を掀げ、衣裳合わせの準備にかかった。式子は、体の動きが楽なようにハイヒールをローヒールに履きかえ、スーツの上衣を取って、絹のブラウス一枚になった。富枝はボーイが運んでくれた洋服箱からドレスを出すと、すぐコートハンガーに掛け、左手にピン・クッションをはめた。

「アフタヌーン・ドレスから着て下さいな」

式子が時計を見ながら云うと、白川洋子はつるりと服から脱け出るようにスリッパ一枚になり、手早くシャントンのアフタヌーン・ドレスを着て、鏡の前でポーズをつけた。ゆるやかに抜いた肩線、ゆったりした胸のふくらみ、腰から裾へのしなやかにつぼまった線——、この三つのポイントが、式子の意図した和服のもつ粹さと、女らしい曲線を強調していた。

「まあ、素晴らしいエレガントなデザイン——、アクセサリーが難かしいわ」

白川洋子は、やや昂奮した声で真っ赤なアクセサリー・バッグを開いた。長方形のバッグの中に、イヤリング、ネックレス、ブローチなどがぎっしり埋まり、特A級のモデルらしく、ざっと三十万円程の自前のアクセサリーを揃えていた。式子は、その中から、象牙色のドレスに合う燦金のネックレスと、イヤリングを選んだ。

「ハンドバッグと靴はこれでいいかしら？」

白川洋子は、黒いスエードに金鍊の金具がついた華奢なバッグと靴を、衣裳ケースから出した。象牙色と黒と金の淡い調和が、鏡の中に映し出され、式子はその品のいい淡さに見惚れた。

「先生、あとまだイブニング・ドレスと、ほかのモデルさんの衣裳合わせが二着分残ってますねんけど——」

富枝は、アフタヌーン・ドレス一着にかかりきっている式子に心配そうな眼を向けた。

式子は、時間を甘く見たことを悔いながら、ホテルの前から大手町の産経ホールへ車を飛ばしたが、モデルの衣裳合わせを終えたのが四時前であったから、三時半から産経ホールで始まっている舞台稽古にはいくら焦ってみても、相当な遅刻であった。富枝は、二時間半ぶつ通しの衣裳合わせの疲れと、式子が時間を甘く見たことに腹をたてているらしく、足もとに洋服箱をたてかけたまま、むくれたように押し黙っていた。

産経ホールの通用門から、事務所を通りぬけて、暗い客席へ入ると、さっき衣裳合わせに来ていた白川洋子が、軽快な旅行着を着、軽快なリズムに合わせて、ステージの中央を旅行者らしいポーズで歩いていた。舞台の袖から演出者が、何か注文をつけると、人を喰った態度で頷き、もう一度、ステ

ージを歩き直した。先程、式子に見せた媚びるような甘さなど、どこを探しても見当らない。式子は、それだけ自分の存在の大きさを示されたような優越感を覚えた。

舞台から眼を離すと、富枝に楽屋へ行ってモデルの着附きつけをするように云い、式子は、関係者が疎らに坐っている暗い客席の中を見廻した。眼が馴れて来ると、前から五、六番目の中央の席に、中田花枝、マダム・ケイコ、中沢万樹子、森かほるなどの錚錚そうそうたるデザイナーが五、六人、かたまつて坐っているのが見えた。式子は、席を起つと、静かにその方へ歩いて行き、舞台の切れ目を確かめてから頭を屈かがめ、

「大庭式子でございます、お時間に遅れまして、失礼申し上げました、皆さまとご一緒にお仕事させて戴くのは初めてでございますから、何かとおよろしく——」

丁寧ていねいに挨拶すると、暗い客席の中で、五、六人の白い顔が一斉に式子の方を振り向き、にこりともしせず、軽く頷くように頭を振ると、無視するようにすうと舞台へ顔を向けた。服飾界へデビューしてから三年にしかならぬ式子が、関西からただ一人選ばれて、十大デザイナーの中に名前を連ねていることに對する激しい反感が籠かこめられていた。

しかし、式子は、不思議なほど除け者にされた心細い孤立感や心に滲しむような辛さが胸に來なかつた。有名デザイナーである彼女たちが、一斉に黙殺するような敵意のある視線を向けたことは、式子の存在を認めている証左であつた。それが、式子にとって快かつた。今は、式子自身のえらさを評価してくれるものでさえあれば、すべて式子にとって快適であつた。

「大庭先生！ 大庭先生のアフタヌーン・ドレスをご用意出来てますか！」

進行表を持った演出者が、舞台の袖から、客席の式子を探すように云つた。

「ええ、もう先程、楽屋へ廻まわりましたから、楽屋の方をお呼び出し下さいな」

そう^{こた}応えと、演出者は、舞台裏に向って、大きな声で呼び出しをかけた。二、三分、舞台が^あ空き妙な静けさが舞台を埋めたかと思うと、象牙色のドレスが、青味がかったライトの中に、ひやりとした冷たさで浮かび出た。誇張ではなく、象牙色の絹が青味がかったライトの中で、象牙のもつ冷たさと気品と美しさに輝いていた。客席に坐っている関係者たちの間に小さな騒^{ざわ}めきが起こり、式子のすぐ近くに坐っている有名デザイナーたちは、重苦しい表情をした。式子はその重苦しきの中に、自分の作品の出来栄を確かめると、今度は、挨拶もせず、有名デザイナーの彼女たちから離れた。

十

産経ホールへの入口には、開場前から若い女性が列をつくり、明るい彩りに埋まっていた。「十大デザイナー作品ショウ」という華やかなタイトルが、若い女性の心を^あ煽ったらしく、ショウの第一回目に引き続き第二回目も、入場を待ち構える若い女性が、賑やかな列をつくっていた。

式子は、ホールの内側からガラス越しに、その賑やかな人の列を眺めながら「十大デザイナー作品ショウ」のことを考えていた。

「十大デザイナー」というそれは、誰が、何を基準にして評価したものか解らなかったが、二カ月前に突然、東京の〇新聞社から「十大デザイナー作品ショウ」に、関西の服飾界を代表して出品してほしいと申し入れられたのだった。関西の服飾界の大御所である大原京子をさしておいて、式子を選んで来たのは、「デザイナー物語の大庭式子」というジャーナリストイックなポスターバリュウをねらう〇新聞社の演出であるらしかった。式子は、それを十分、承知の上で、華やかな笑いをうかべて引き受けたのだった。式子にとって、十大デザイナーに選ばれる動機など、もはや小さな問題であった。僅か二、三年の間に、学校の組織が大きくなり、強大な宣伝力を持つ映画の衣裳デザインに成功して、

瞬く間に有名デザイナーになってみると、有名ということの中に占める実力の比率は、僅かなものであった。実力より、突如として、外から氣紛れに舞い込んで来る幸運と、それを巧みに利用する才能が、有名というものの正体であった。だから、式子は、十大デザイナーに選ばれる動機よりも、十大デザイナーの一人に加えられた事実の方が、貴重であった。それだけに、十大デザイナーの作品を観るために昂奮したような表情で、早くから開場を待ち構えている女性の群を見ると、短期間にスターダムにのし上って行った自分に、快い昂り^{たかぶ}を覚えた。

「大庭先生！　こちらにいらしたのですか」

突然、背後から息をはずませる氣配がした。振り返ると、昨年、大阪へ出張して来たN婦人雜誌の若い婦人記者であった。

「ずいぶん、お探し致しましたわ、ほかの先生方は、皆、控室にいらっしゃるのに、大庭先生だけお見えにならないのですもの——」

そう云い、はずませていた息を整えると、

「一回目のショウで、先生のお作品、大へんな評判ですわ、デザイナー物語の時の甘いロマンティックなデザインと違って、今度のは、伝統的な日本の衣服をモチーフにされた渋い日本的なデザインですね。実は、デザイナー物語の時のデザインには、批判的だった専門家の方も、ひそかに先生のレパトリーの広さには驚いていらっしゃる様子ですわ。これで、大庭先生の評価は、決定的におなりになりましたわね」

若い婦人記者は、上気したような眼を式子に向けたが、評価というもってもらしい言葉が、式子には可笑しかった。評価でさえ、有名さに附随して生まれて来るものであった。式子は、同じようなデザインを、既に三年前、関西デザイナー協会のファッション・ショウで発表したが無名デザイナー

の式子は、今日のような評価を受けなかった。式子は、心の中で、評価という言葉を、鼻の先につまみ上げるようにしながら、

「やはり、いい仕事をするのですねえ、いい仕事さえしておれば、黙っていても、ちゃんとした評価をして下さいますもの——」

式子は、もっともらしい表情をして云った。

最終回のファッション・ショウが始まりかけると、式子は、来賓受付と来賓席を何度も往復して、白石教授の姿を探した。

来賓受付には、白石教授が見えたらすぐ連絡してくれるように頼み、来賓席の方は、式子が始終、気をつけて覗きに行ったが、ショウの半ばを過ぎても、白石教授の姿は現われなかった。やはり、ファッション・ショウなど興味がないと云っていた白石教授のことであるから、式子が飛行機の中から出した速達便は、一読しただけで、机の片隅にほうり放しにされているのかもしれない。式子は、「十大デザイナー作品ショウ」というタイトルの華やかさに気負い込み、うかうかと招待状を出し、開演中の人気のない廊下に、人待ち顔にたっている自分が腹だたしかった。

式子は、つと廊下の扉を押し、客席へ入った。客席は、若い女性の観客でぎっしり埋まり、両側の通路にまで、人がたっていた。舞台は、中沢万樹子デザインの気取ったアフタヌーン・ドレスが、明るいライトに包まれて、しゃなりしゃなり、舞台の中程を歩いていた。くすぐったいほどの気取りと、パリ・モードの生な模倣が鼻についた。式子は、みくびるように舞台から眼を逸すと、来賓席に視線を向けた。

前から五、六番目の来賓席には、繊維メーカー、商社、百貨店の服飾関係者や、婦人雑誌の編集長が顔を並べていた。式子は、暗い通路の端から、その一人一人の顔を縫うようにして見て行っただが、